

# 『Vajravidāraṇa-dhāraṇī』の諸相

## —他文献の中でみられる引用について—

田村宗英

### □0. はじめに

ヴァジュラヴィダーラナ ダーラニー  
『Vajravidāraṇa-dhāraṇī (金剛摧碎陀羅尼)』における論考は、現代密教19号でも発表したことがあるが、しばらく期間が空いてしまったため、その後の研究でわかったことも含めて、改めて報告したい。

本研究では、□1. において Vajravidāraṇa-dhāraṇī の全体像を、□2. においては、他文献の中でみられる Vajravidāraṇa-dhāraṇī の引用について考察していくものである。

### □1. Vajravidāraṇa-dhāraṇī の全体像

#### ① Vajravidāraṇa-dhāraṇī の内容と文献上の位置

『Vajravidāraṇa-dhāraṇī』はチベット大蔵経中に多くの註釈書や儀軌類が収められ、インド・チベットにおいて大変重要視されていたと考えられる。註釈者には、シャーンタラクシタ・パドマサンヴァバ・ブツダグフヤなど著名な人物が名を連ねている。また、現在でもチベット地域において根強い信仰を集めており、常用經典集の中にもこの陀羅尼がくみこまれている。主に、山や川の浄化、いわゆる地鎮作法に多く用いられているようである<sup>①</sup>。しかし、未だに本格的な研究はなされていない状況である。

陀羅尼本文の内容<sup>②</sup>は、金剛手が仏の不可思議な力（加持）をうけ、忿怒金剛手となって説いたものとされる。「一切の有情を恐れさせる」、

『Vajravidāraṇa-dhāraṇī』の諸相

「停止させる」、「惑乱させる」など荒々しい内容が中心となっており、最後に陀羅尼の功德を偈の形で説いている。

これまでの研究で、成立年代は7世紀末～8世紀頃と推定され、『ブトン仏教史』（Toh 蔵外5197）の第四章「目録部」におけるタントラ文献の分類<sup>(3)</sup>に従うと、所作タントラのうちの金剛手タントラ（金剛部）に属するものである。

また、ネパールでまとめられたといわれる短い七つの陀羅尼經典集『Saptavāra』<sup>(4)</sup>の第二番目を構成するものである。

## ②テキスト類

〈Vajravidāraṇa-dhāraṇī 本文〉

skt.ed<sup>(5)</sup> : Yutaka Iwamoto :Beiträge zur Indologie, II, S.7-9.

Tib : Toh750=949, Ota406=574

Badsra bi dā ra ṇā nā ma dhā ra nī/  
rDo rje rnam par ḥjoms pa ses bya baḥi gzus/

Ch : (a)大正 1416

金剛摧碎陀羅尼（一卷）

宋 慈賢 訳

(b)大正 1417

壞相金剛陀羅尼經（一卷）

元 沙囉巴 訳

〈注釈書〉

Tib : Toh2678-2687, Ota3502-3511

〈儀軌〉<sup>(6)</sup>

Tib : Toh2907-2942, Ota3733-3767

### ③尊格・マンダラについて

古い時代から広くこの陀羅尼が流布し、ある一定の効力があると認められていた証として、Vajravīdāraṇa の尊格化が挙げられる。効果が大きいと人々に認められた陀羅尼は尊格化されていくが、この Vajravīdāraṇa も例外ではなかったようである。日本では全く馴染みのない尊格ではあるが、インド（特に西北インドのラダック）・チベットにおいては古くから信仰されていたようで、マンダラや仏像など比較的数量多くの作例が見られる。身体の色は、青・青緑・白色などで、右手に羯磨金剛杵、左手に金剛鈴を持つなど、様々な形態が伝えられている<sup>(7)</sup>。マンダラについても、二十三尊<sup>(8)</sup>、十五尊、十九尊、九十七尊などの形式があるようである。

### □2. 他文献の中でみられる Vajravīdāraṇa-dhāraṇī について

これまで進めてきた研究の中で Vajravīdāraṇa-dhāraṇī に先行する陀羅尼や經典類を見出すことはできなかった。

しかし、他文献の中で Vajravīdāraṇa-dhāraṇī が登場する例があったので、以下に引用を示し、項目を立てながら考察していきたい。ここでは特に、ブツダグフヤの註釈が引用されている例を中心に、他の註釈も参照しながら進めていく。

#### (1) ケートゥプ・ジェ著『タントラ概論』にみられる引用

平成 23 年度から、伝法院の開設講座「インド・チベット密教概説」（担当：金本拓士教授、クンチョック・シタル講師）において、ケートゥプ・ジェ (mKha grub rje)<sup>(9)</sup> の『タントラ概論 (rGyud sde spyiḥi rnam par gshag pa rgyas par bśad pa)』（Toh 蔵外 5489）<sup>(10)</sup> を読み進めている。この中でケートゥプ・ジェは、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī を所作タントラのうちの金剛部の主尊<sup>(11)</sup> に属するタントラとして分類し、註釈を引用しながら解説している。該当部分を示すと以下の通りとなる。

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の諸相

Vajravīdāraṇa の陀羅尼に関しては、翻訳官たちによって二十五頌に翻訳された。

[この陀羅尼は]「**金剛座**で説かれた」とある人<sup>(12)</sup>は言うが、大阿闍梨ブツダグフヤは『不可思議經 (bsam gyis mi khyab paḥi mdo)』<sup>(13)</sup>を引用して、「金剛座はさとり [を得た] 場所だから魔もの (māra)<sup>(14)</sup>を教化する場所であって、他の有情を教化する場所ではないから、そこではお説きにならなかった」と否定した。そして、金剛須弥山の中とされる、あらゆる方向がすべて金剛で成り立っている最上の山の東南方に世尊がいらっしやった時に、**アジャータシャトル王 (阿闍世王) — ‘邪心王’**を異名とする [王] が、父王であるビンピサーラ王を殺した。十不善戒などを設定することによって、人間たちに善くない行いをさせたので、世間の衆生は、善行を喜ぶものたちの力は弱まり、悪行を喜ぶものたちの力が増した。病氣などが生じ、人間たちが苦しむようになったので、四天王は世尊の御前に行き、それから守護する方法を尋ねた。世尊は金剛手に「彼らを守護する方法を考えなさい」と促したので、金剛手は仏の威力と仏の加持によって、Vajravīdāraṇa の姿に変わり、教えを説いた。これに、**百八章ある中から、チベットに翻訳されたのは第一章**である。残りの章は後タントラでもあり、釈タントラでもあるから、「**すべてのタントラの根本である**」と述べられた意味は、第一章は残りの章すべての根本タントラとして説示されているにすぎない。これは、四部タントラすべての根本として説かれているという意味ではない。百八章に属さない Vajravīdāraṇa の釈タントラ『金剛山宝楼閣の陀羅尼』<sup>(15)</sup>はチベットに翻訳された。

(F.D.Lessing & Alex Wayman : *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*, p.128-131)

なお、和訳については講座で使用されたものを基本とし、一部筆者が手を加えた<sup>(16)</sup>。

## ◆金剛座をめぐる見解

ここで、ケートupp・ジェはブツダグフヤの註釈を引用し、

大阿闍梨ブツダグフヤは『不可思議経 (bsam gyis mi khyab paḥi mdo)』を引用して、「金剛座はさとり [を得た] 場所だから魔もの (māra) を教化する場所であって、他の有情を教化する場所ではないから、そこではお説きにならなかった」と否定した。

と述べている。この箇所を実際にブツダグフヤ註に照らし合わせてみると、以下の通りとなる。

【ブツダグフヤ註】<sup>(17)</sup>

金剛座ではなく、金剛座を占めるとおっしゃっているのでもないのであって、すなわち『不可思議経』から、「シャーリプトラやすべての如来は、はじめは金剛座においてさとりに到達したのであるが、そこで法をお説きになったということではない」。

それでは、どのようなのかというならば、そこにおいては魔ものが教化されるのであり、他の有情が教化されることはないという意味なのである。(Toh2680,178a,3-4)

ケートupp・ジェが引用しているものとほぼ同じであり、「金剛座 (rdo rje gdan)」についても「魔ものが教化される [場所]」として統一した見解がみられる。

しかし、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 本文自体に「金剛座 (rdo rje gdan)」という語はみられない。本文では、「世尊 (仏) は金剛に住しておられた (bcom ldan ḥdas rdo rje la bshugs te)」となっており、これは他の註釈内での引用を確認しても同じである。ここで、シャーンタラクシタ・パドマサンバヴァ・ヴィマラミトラの註釈を対比させると以下の通りとなる。

『Vajra vidāraṇa-dhāraṇī』の諸相

【シャーントラクシタ註】<sup>(18)</sup>

「金剛に住しておられた (rdo rje la bshugs)」というのは、[この] 經典を説かれたときに [身体は] 外的な御座所に住しておられるのだが、内的な真実の場にありながら住しておられるのである。(Toh2678,157b,6-7)

【パドマサンバヴァ註】<sup>(19)</sup>

「金剛に住しておられた (rdo rje la bshugs)」というのは、菩提樹のある金剛の御座所 (rdo rje hi gdan) において、四門などによって飾られたお城の中央で金剛結跏趺坐と降魔の御印 [をなして] 住しているのである。もしくは、大いなる慈悲という三昧に入定し、大いなる慈悲によって魔ものの諸々の力を破壊する、と説かれている。(Toh2679,163b,3-4)

【ヴィマラミトラ註】<sup>(20)</sup>

「世尊 (仏) が金剛に住しておられた (bcom ldan ḥdas rdo rje la bshugs te)」というのは、四魔を破壊したことについて言っているのである。あるいは、世尊が金剛のような三昧にお心を入定させたことを言っているのである。(Toh2681,186b,6-7)

三者とも、本文からの引用は「金剛座 (rdo rje gdan)」ではなく、「金剛に住しておられた (rdo rje la bshugs)」としている。そのため、陀羅尼本文には「金剛に住しておられた (rdo rje la bshugs)」という語があったことに間違いはないであろう。

では、ブツダグフヤはどこから「金剛座 (rdo rje gdan)」ということばを導いたのが問題となるが、直前の内容をみると、

【ブツダグフヤ註】

どこで聞いたのかというならば、円満した [場所である]、金剛に [世尊が] 住しておられたときに聞いたのであり、すなわち意味は不二の智

慧であって、どのような姿〔の場所〕であるかというならば、金剛宝の須弥山という場所の北西、金剛須弥山の頂上と呼ばれる場所などの金剛で満ちあふれているところで聞いたのである。(Toh2680,178a,1-2)

と述べており、他の註釈と同じく本文に出てくる「金剛に住しておられた (rdo rje la bshugs)」を使用して説明している。

ここで「金剛 (rdo rje)」という語の解釈に着目すると、シャーントラクシタ・パドマサンバヴァ・ヴィマラミトラの三者はそれぞれ異なった表現をしてはいるものの、金剛のように揺るぎない三昧に入っている状態を指しているものと考えられる。三昧については、シャーントラクシタがいう内的な側面であるが、ブツダグフヤはというと「すなわち意味は不二の智慧であって」と述べており、これは直接的に三昧などということばは使っていないが、三昧に入ったことにより獲得された智慧と解釈するならば、他の註釈家たちと同じ立場だといえるだろう。

一方、具体的に「金剛〔という場所〕」としてみる外的な側面については、パドマサンバヴァが「菩提樹のある金剛の御座所」と述べている。そこから、仏がさとりを獲得した場所であると判断される。これは、ブツダグフヤの解釈と通じる部分である。さらにもう一点、他の註釈家とブツダグフヤの解釈が通じる場所は、「魔ものが教化される場所」とする点である。パドマサンバヴァが「降魔の御印」や「大いなる慈悲によって魔ものの諸々の力を破壊する」と述べている部分や、ヴィマラミトラが「四魔を破壊したこと」と述べていることから、「魔ものが教化される場所」と解釈していたと考えられるからである。以上のことから凡そブツダグフヤとシャーントラクシタ・パドマサンバヴァ・ヴィマラミトラの解釈は同じだと言ってよいであろう。

さらにここで、外的な側面としての「金剛〔という場所〕」は一体どこに位置するののかという点については、ブツダグフヤのみが言及しており、

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の諸相

「金剛宝の須弥山という場所の北西、金剛須弥山の頂上と呼ばれる場所などの金剛で満ちあふれているところ」

としている。これを引用したケートゥプ・ジェは、

「金剛須弥山の中とされる、あらゆる方向がすべて金剛で成り立っている最上の山の東南方に世尊がいらっしゃった時」

としており、金剛須弥山の中についてより詳しい説明を加えている。このことから、ケートゥプ・ジェはブッダグフヤの註釈を引用しながらも独自の解釈もしくは他からの引用なども盛り込んで記したのではないかと考えられる。

#### ◆アジャータシャトル（阿闍世）王について

この該当箇所におけるブッダグフヤ註は以下の通りとなる。

##### 【ブッダグフヤ註】

ジャンブードヴィーパ（瞻部洲）における王、ビンビサーラの息子であり、アジャータシャトル（阿闍世）とも呼ばれる [王] が、誤った心を起こしてばかりいる時、[父である] ビンビサーラ [王] の御足に鉄でできた足かせをはめるといふ悪行をなし、そして口からマーラヤ<sup>(2)</sup>を飲ませ、母と父を殺した。それが、衆生の中に十不善行として入り込んだので、あらゆる魔もの (amaṇuṣya) たちが現れて、様々な病気がはびこった。そのため、すべての有情は苦しみ、それぞれに救いを求めて声をあげた。それを、四天王がご覧になって、世尊に守護を [する方法を求めたが自身では] お説きにならず、金剛手を促した [ので]、[金剛手は] 金剛をまとう身体となり、Vajravīdāraṇa の数えきれない眷属をともなって、[Vajravīdāraṇa] の真言をお説きになった。それゆえ、魔もの (bhūta) と誤った心 [を持つアジャータシャトル王] は制圧され、この真言を [ア



ジャータシャトル王は] 実践したので、菩提を得ることができたと經典に説かれている。(Toh2680,178b,3-6)

ここは、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī が説かれた縁起 (nidāna) を述べているところである。ケートアップ・ジェの引用よりもアジャータシャトル王の行状について詳しく述べているのだが、他の註釈を見てもこのような縁起を説く例はない。さらに、アジャータシャトル王が父のビンピサーラ王を殺害したことに關して、『觀無量壽經』では、「ビンピサーラ王を幽閉した」<sup>(22)</sup>、『未生冤經』<sup>(23)</sup>では父王を投獄して餓死させた経緯などが述べられているが、ブツダグフヤ註に出てくるような記述は他では見当たらない。では、ブツダグフヤが独自の解釈をしたのかということ、最後に「經典に説かれている」と述べているため、何らかの經典から引用していることを示している。この經典については、少し前に『金剛須弥山頂の經典 (rdo rje lhun po ri rab kyi zom gyi mdo)』と記されており、ここからの引用だということがわかる。しかしながら、『金剛須弥山頂の經典 (rdo rje lhun po ri rab kyi zom gyi mdo)』についての詳細は不明であるが、次項でも触れるようにブツダグフヤが参照していたことは間違いないであろう。

#### ◆百八章あるうちの第一章だけが翻訳されたことについて

ここでのケートアップ・ジェの記述は「これに百八章ある中から」としており、具体的な經典名などは挙げていない。文脈からすると最初にててくる『不可思議經』が百八章あるようにも読めてしまい判然としない箇所である。ここをブツダグフヤは、

#### 【ブツダグフヤ註】

これは、『金剛須弥山頂の經典 (rdo rje lhun po ri rab kyi zom gyi mdo)』といわれるものの残り百八章あるうちの第一章であると述べられており、これに [基づいて] これ (Vajravīdāraṇa-dhāraṇī) を解説して

『Vajraśāraṇa-dhāraṇi』の諸相

いるのである。その經典を私は見たのである。(Toh2680,184a,5-7)

としており、『金剛須弥山頂の經典 (rdo rje lhun po ri rab kyi zom gyi mdo)』が百八章あると明記している。さらに、私はそれを見たとき念を押して強調している。これは、Vajraśāraṇa-dhāraṇi に広本が存在することを示す内容であるが、『金剛須弥山頂の經典』について他の註釈家やケートゥップ・ジェの言及は一切ない。一方、ケートゥップ・ジェが挙げる『金剛山宝楼閣の陀羅尼』についてブツダグフヤは言及していない。このことから、ケートゥップ・ジェの時代には『金剛須弥山頂の經典』は散逸していた、かつ、ブツダグフヤの時代には『金剛山宝楼閣の陀羅尼』はまだ成立していなかったのではないかと推察される。

#### ◆「すべてのタントラの根本である」ことについて

「すべてのタントラの根本である (rgyud do cog gi rtsa ba ste)」という文章は、陀羅尼本文からの引用である。註釈における該当箇所は以下の通りである。

##### 【ブツダグフヤ註】

‘すべての’ というのは、ひとつ残らずという意味である。‘根本’ というのは、他においてはみられないもので、[これから] 他 [のもの] を生み出すのである。

《前出部分→》これは、『金剛須弥山頂の經典』といわれるものの残り百八章あるうちの第一章であると述べられており、これに [基づいて] これ (Vajraśāraṇa-dhāraṇi) を解説しているのである。その經典を私は見たのである。(Toh2680,184a,5-7)

##### 【シャーンタラクシタ註】

功德と威力と大きな利益によって、すべてのタントラ・經典の精髓であり根本であるから「すべての經典の根本であり」というのである。なぜ

かというならば、その他多くのタントラや経典の功德はあるけれども、有情の罪障を取り除き苦しみを浄化する方便を他〔の経典類〕は説かないから〔「すべての経典の根本であり」というのである〕。(Toh2678,160b,4-5)

【パドマサンバヴァ註】

「根本であって」というのは、鎮めるなどのはたらきすべてを説くからである。(Toh2679,167a,6-7)

ここで、ブツダグフヤは‘すべて’と‘根本’の意味について逐語的な説明を施した後、ケートupp・ジェが解釈している通り、経典の構成について述べている。一方、シャーンタラクシタ・パドマサンヴァバは経典の功德の面から「根本」なのだとしている。以上のことから、ブツダグフヤは‘根本’などの意味について経典の構成に重きを置いて解釈し、シャーンタラクシタ・パドマサンヴァバは経典の内容面に重きを置いて解釈をしていることがわかる。

(2) 酒井真典著『大日経の成立に関する研究』にみられる引用

酒井真典氏は、『大日経の成立に関する研究』の中で、Vajravīdāraṇadhāraṇī が大日経「説本尊三昧品」の成立に深く関わっていると指摘している<sup>(24)</sup>。その根拠として、ブツダグフヤ註における‘六種本尊’の引用を挙げている。ここで、酒井氏が引用しているブツダグフヤ註をみると、

【ブツダグフヤ註】

これもまた経典から、はじめに沐浴をなして、瑜伽行者は、金剛座にとどまり、供養と祈願によって六種の本尊を習修しなさい  
空と文字と音声、色と印、相という六種であり、瓶の生起などを完成させて、マニ宝〔のように尊い〕行いである真言を念誦し、肉などの七つ

## 『Vajraśīdāraṇa-dhāraṇī』の諸相

は捨て去りなさい。(Toh2680,179b,6-7)

この引用は、先にも出てきた『金剛須弥山頂の經典』から取り上げている箇所であり、六種とは空・文字・音声・色・印・相であると端的に説明されている。では、六種本尊とは何であるのかというところ、この引用の前に、

### 【ブツダグフヤ註】

空性などの菩提 [分]<sup>(25)</sup>である六種の本尊によって、自身を金剛手となし、現前の瓶のまわりを六種の本尊が [取り囲んで] いると観想する。(Toh2680,179b,5-6)

と述べているように修行法のひとつであることがわかる。しかし、その後この註釈の中で六種本尊に対する詳しい説明はみられない。酒井氏は、この六種本尊<sup>(26)</sup>について、ブツダグフヤの『上禪定品』(Toh2670)と『大日経逐語釈』(Toh2663)に詳述されているとしているとし<sup>(27)</sup>、この六種本尊が後に要略されて大日経にとかれる種三尊<sup>(28)</sup>へと進展していったとする。そのため、六種本尊についてはブツダグフヤ独自の解釈をこの Vajraśīdāraṇa-dhāraṇī の註釈を作る際にも盛り込んだものと考えられるが、『上禪定品』や『大日経逐語釈』などの関連から考察していくべき課題である。

### □3. まとめ

以上、これまで□1. において Vajraśīdāraṇa-dhāraṇī の全体像を、□2. においては、他文献の中でみられる Vajraśīdāraṇa-dhāraṇī の引用についてみてきた。

□2. (1) においてはブツダグフヤの引用を中心に、シャーンタラクシタ・パドマサンバヴァ・ヴィマラミトラの解釈を適宜参照しながら進めてきたが、そこで見えてきたことは、ブツダグフヤ註の特殊性であ

る。もちろんそれぞれの註釈家の解釈が一致する部分もあったが、經典の構成や引用している箇所などについてはブツダグフヤにしかみられない記述が非常に多かった。特に、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī の広本というべき『金剛須弥山頂の經典 (rdo rje lhun po ri rab kyi zom gyi mdo)』についての言及は大きな課題として提示される。また、(2)においては、六種本尊からみる Vajravīdāraṇa-dhāraṇī と大日経「説本尊三昧品」との相関性についてみてきたが、これも先の經典からの引用が大きな鍵となっている。文献中の引用は、引用した作者の意図と解釈が含まれる貴重な資料である。そこから、思わぬ広がりや多くの課題を提示してくれるものとして今後も引き続き注意しながら研究に取り組んでいきたい。

#### 〈キーワード〉

Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 引用 ブツダグフヤ

#### 註

- (1) クンチョック・シタル (高松宏寶) 氏よりご教示いただいた。ここに感謝申し上げます。
- (2) Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 本文の全訳は、田村宗英：「Vajravīdāraṇa-dhāraṇī についての一考察」、『現代密教』19号, p.181-202に掲載。
- (3) 西岡祖秀：『ブトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6
- (4) saptavāra (1. Vasudhārānāmāṣṭottaraśataka 2. Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 3. Gaṇapatihr̥daya 4. Uṣṇiṣaviṣayādhāraṇī 5. Parnaśabaridhāraṇī 6. Māricidhāraṇī 7. Grahamātr̥kādhāraṇī) の配列やまとめ方はネパールで創始されたものといわれる。
- (5) この他に Skt.MSS. が多数存在する。(『梵語仏典の研究』密教經典編, p.148)
- (6) 儀軌については、ジュニャーナシュリーとその師マニヴァジュラや先々師のガンガーダラの著作が相当数残されている。そのため、この陀羅尼がどのように受容されて広まっていったのかを解明する上で、この一系統を丹念に辿っていくことは大変重要である。(羽田野伯猷『チベット・インド学集成』インド篇Ⅱ「ジュニャーナ・シュリー・パドラ著『聖入楞伽經註』おぼえがき」p.104-105)
- (7) 田中公明：『玉重コレクション タンカの精華』, p.49

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の諸相

- (8) 森雅秀：『『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説の108 マンダラ』、『高野山大学密教文化研究所紀要』第12号, p.116-208
- (9) ケートップ・ゲルク・ペルサンボ (mKhas grub dGe legs dpal bzang po /1385-1438) は、ツォンカパの二大弟子の一人。第三代ゲルク派ガンデン座主。
- (10) 講座における主な使用テキストは、  
F.D.Lessing & Alex Wayman : *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*, 1968
- (11) この中でケートップ・ジェは、所作タントラの金剛部を①正尊②主尊③母尊④忿怒尊・母尊⑤使者と眷属の男女、という5つに分類している。
- (12) ここでいう「ある人」について、シャバリパーの立場ではないかという。  
(F.D.Lessing & Alex Wayman 前掲書, p.128-129)
- (13) F.D.Lessing & Alex Wayman は 前 掲 書 p.129 で、Ārya-Tathāgatācintyaḡuhyanirdeśa-nāma-mahāyānasūtra (Toh47), 大寶積經密迹金剛力士会 第三 (大正 310) を挙げているが、チベット語から還元したサンスクリット語だと Acintya-sūtra だけとなる。Acintya がつく経典は相当数に上るため、今一度確認が必要である。
- (14) 本論文で出てくる、māra · amanuṣya · bhūta など魔・鬼神や人非人、悪霊などと訳されるが、災いをもたらしたり否定的な影響力をもつものとして、ここでは全て「魔もの」と訳した。Vajravīdāraṇa-dhāraṇī では、様々な種類の魔ものや病気が出てくるため、今後これらの意味を明確にし、訳し分けを行っていく予定である。
- (15) Ārya mahāvajrameru śikharakūṭāgāra-dhāraṇī (Toh751), 大金剛妙高山樓閣陀羅尼 (大正 1415)。  
現時点では、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī とこの経典との間に明確な関連を見出すことができなかったが、今後継続して考察していきたい。
- (16) 理解の便を図るために、本文および註で示す訳文に [ ] で括って語句を補い、言い換えやチベット語ローマナイズ、漢訳の慣用語、還元サンスクリット語は ( ) で括って示している。また、 部分は検討していく箇所を示している。
- (17) ḡphags-pa rdo-rje rnam-par-ḡjoms-pa shes-bya-baḡi gzuṇs-kyi rgya-cher ḡgrel-pa rin-po-che gsal-ba shes-bya-ba / Ārya-Vajravīdāraṇa-nāma-dhāraṇīṭikā-ratnābhāsvārā-nāma (Toh2680)
- (18) Rdo-rje rnam-par-ḡjoms-pa shes-bya-baḡi gzuṇs-kyi bśad-pa / Vajravīdāraṇa-nāma-dhāraṇīṭikā (Toh2678)  
シャーンタラクシタはこの註釈において Bodhisattva と呼ばれている。チベット

の流伝前期において、シャーンタラクシタは「親教師 Bodhisattva (mkhan po Bodhisattva)」と呼ばれていることから考えて、かなり古い段階でこの註釈書が記されていたことがわかる。

- (19) Rdo-rje rnam-par-hjoms-pa shes-bya-baḥi gzuñs-kyi rnam-par-bśad-pa rdo-rje sgron-ma shes-bya-ba / Vajravidāraṇā-nāma-dhāraṇivyākhyānavajrāloka-nāma (Toh2679)
- (20) Rdo-rje rnam-par-hjoms-pa shes-bya-baḥi gzuñs-kyi bśad-pa / Vajravidāraṇā-nāma-dhāraṇīṭikā (Toh2681)
- (21) māraya : 詳細は不明だが、毒の一種と考えられる。
- (22) その時、王舎大城に一太子あり。阿闍世と名づく。調達 [という] 悪友の教えに随順して、父王の頻婆娑羅を収執し、幽閉して七重の室内に置き、もろもろの群臣を制して一 (ひとり) も往くことえざらしむ。(大正蔵 12 卷, p.341 上段)
- (23) 『未生冤経』では、アジャータシャトル王が父王を死に至らしめる経緯が端的に述べられている。また、子からひどい仕打ちをうけても決して父は恨むことなく死を迎えるという点に主眼が置かれているようである。(大正蔵 14 卷, p.774 中段～ p.775 中段)
- (24) p.15-23
- (25) byan chup pa : ここでは菩提分 (さとりを得るための正しい手立て) という意味だと考えられる。
- (26) F.D.Lessing & Alex Wayman は前掲書 p.162 において、五相成身観の第一 (通達菩提心) と六種本尊の第一 (空)、五相成身観の第二 (修菩提心) と六種本尊の第二 (文字)、五相成身観の第三 (成金剛心) と六種本尊の第三 (音声)、五相成身観の第四 (証金剛身) と六種本尊の第四 (色)、五相成身観の第五 (仏身円満) と六種本尊の第五 (印)、第六については五相成身観の後に人間の世界に戻った釈尊が様々な相 (降魔、成仏、転法輪など) を示すことと六種本尊の第六 (相) が対応すると述べている。
- (27) p.16-22
- (28) 大日経「説本尊三昧品」では、諸尊に三種の身有り、いわゆる字と印と形像となり。彼の字に二種有り、謂わく声と及び菩提心となり。印に二種有り、いわゆる有形と無形なり。本尊の身に亦た二種有り、いわゆる清浄と非清浄となり。(大正蔵第十八卷, p.44 上段) とあり、字・印・形像という三種類の本尊をそれぞれ二つに分けて説明している。そのため、三種類と言いつつも、実質的な内容としては六種類となる。